
名機たちへの追憶 ドイツ空軍編

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名機たちへの追憶 ドイツ空軍編

【著者名】

Nコード

流水郎

【あらすじ】

搖る無き信念と、尾翼に刻まれた鉤十字の哀しき宿命を背負い、
空の騎士たちは戦う。その先にあるのは栄光か、絶望か……。ド
イツ空軍の名機たちと、それに命を預け戦ったパイロットたちの短
編集です。（不定期更新）

氷の大砲鳥 … ユンカースJU87G 戰車攻擊機（前書き）

艦魂物を連載中の私ですが、氣分転換を兼ねて書いた艦魂抜きの短編を徐々に掲載していきます。

艦魂と違い萌え要素は無し（私にその点を期待してる人はいないと思いますが）。

初心者の方のために用語説明

急降下爆撃機……文字通り、標的目がけて急降下しながら爆弾を投下する爆撃機で、ピンポイントの攻撃が可能。機動性が要求されるため、戦闘機と同サイズの機が多い。

横滑り……ラダー（垂直尾翼の方向舵）を使って、機体を左右へ滑るように動かすこと。

スターリングラード……ドイツ・ソ連の戦いで最大の戦場となつた都市。現在はボルゴグラードと名を変え、同じく多大な戦禍を被つた広島などの都市とも姉妹都市関係を結んでいる。

ルーデル大佐……史上最強の対地攻撃機乗り。ソ連との戦いで戦車519両、装甲車・トラック800両以上を破壊した上に、30回撃墜されても生還したことで有名。片足を失いながらも義足をつけて戦場に戻った超人的なパイロット。

冰の大砲鳥 … ユンカース JU87G 戰車攻擊機

ユンカース JU87G

最大速度：375 km/h

武装：37mm機関砲×2（両翼下）、7.92mm砲×1（後部機銃）

乗員：2名

ドイツ空軍の急降下爆撃機の代名詞とも言える機体。

生産が開始されたのは零戦よりも前で、収納できない固定脚のため速度は低かったが、後継機に恵まれなかつたこともあり終戦まで戦い続けた。

このG型はソ連軍戦車、特にT-34中戦車対策として開発された機体で、主力のD型をベースとして爆撃能力と引き替えに37mm機関砲ポッドを搭載している。

翼の下に重武装を搭載したため重量・空気抵抗共に増加し、機動性は著しく悪化したが、熟練したパイロットが操縦すれば絶大な力を發揮した。

スターリンをして「ソ連人民最大の敵」と言わせしめたハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐の活躍でも有名。

⋮⋮⋮

田を田のよつにして、私は地面を見下ろした。

小さく見える、ソ連軍の戦車部隊。そして空には群れを成す敵戦闘機。

趨勢はソ連軍に傾いており、いくら破壊しても沸き続ける戦車部隊相手に、ドイツ軍は苦戦を強いられていた。

『攻撃隊、我らが道を開く。存分に敵戦車を狩れ』

護衛の FW190から通信。

隊長機が宜しく頼むと応じた。

まずはJu87Dが急降下爆撃をかけ、対空砲を潰す。

そこへ我々のJu87Gが突入し、敵戦車を叩きつぶすのだ。

G型はダイブブレークが撤去されていて急降下爆撃はできないが、代わりに37mm機関砲を搭載している。

本来は対空砲として造られたFlak18という機関砲で、その威力は絶大。

人呼んで「カーネンフォーゲル 大砲鳥」……戦車狩り専門機だ。

「征くぞ、ルドルフ」

「はい！」

後部座席の機銃手に呼びかけ、高度を下げていく。

先行するするD型が背面降下を開始した。

昔は『ジェリコのラッパ』と呼ばれた威嚇用サイレンを鳴らしながら急降下したものだが、今では隠密性の方が重視され、サイレンは取り外されている。

ソ連軍の対空砲座が火を噴くが、それでも爆撃隊は降下を続ける。

刹那、轟音。

彼らの投下した爆弾が炸裂し、対空砲が次々に焼き飛ぶ。

ソ連兵も必死で、爆炎の中から盛んに機銃で応戦している。

「突入！」

私は更に機首を下げ、敵戦車に接近する。

時代遅れの固定脚のため速度は遅いが、反面低空での安定性は高く、地上目標に狙いがつけやすいのがこの機体の利点だ。

ラダーで機体を滑らせて、一番近いT-34に狙いをつけ……
撃つ！

発射の反動で機体にガクン、ガクンと衝撃が走り、私は機首を上げて一時離脱。

その瞬間、地上からの爆発音が聞こえた。

「命中確認！」

ルドルフが叫ぶ。

T-34はあるでワインの栓を抜いたかのように、砲塔部分が吹き

飛んでいた。

戦車というのは大抵上面装甲が最も薄いもので、航空機なら有効な攻撃ができる。

加えてどんな頑丈な戦車でも、内部に抱えている砲弾に誘爆したら木つ端微塵だ。

「もう一回行くぞ！」

「待った！ 後方に敵機！」

「ちっ、撃ちまくれ！」

私に言われるまでもなく、ルドルフは機銃を操作して弾をばらまいた。

しかし後部銃座というのはあくまでも牽制のためのもので、滅多なことでは敵機を撃墜できない。

私は機体を急旋回させる。これでもベテランだ、そう簡単に食われてたまるものか！

「中尉、味方機です！」

見ると、護衛のFW190が接近し、ソ連軍機に攻撃をかけていた。敵機は私たちを追うのを諦め、回避行動をとる。

「デーニツツ大尉たちか。命拾いしたぜ……」

帰つたら一杯奢ることにしよう。

私は旋回して一旦距離を取り降下、再度攻撃を仕掛ける。

生き残った対空兵器の攻撃を縫つようとかわしつつ、横に並んでいる一台の戦車を標的に選んだ。

「一回同時に破壊してみるか」

「えつ、本気ですか！？」

「まあ見ていろ！」

先ほど一発撃つてしまつたから、残りの砲弾は四発。弾が大きいだけに装弾数はあまりにも少なく、反動や重量の関係から一門同時にしか撃てないのだ。

直進する時間を少なくするためにギリギリまで接近してから、まず右側の戦車に照準を合わせる。

……今だ！

トリガーを引いた直後、ラダーで機体を横滑りさせ、左の戦車を狙う。

照準を合わせている時間は無いので、照準で標的を「なぞる」ようにして、交わった瞬間トリガーを引く。

命中率を上げるため、今度は一連射。

即座に旋回して離脱。地上から爆発音が聞こえてきた。

「やつましたよ中尉！　T - 34が並んで燃えます！」

「まつはつは、対地攻撃のエースはルーデル大佐だけじゃないってことや」

声を上げて笑つた直後、鈍い金属音が数回響いて、機体が震動した。

「いかん！」

私は咄嗟に機体を捻つて回避。

対空機関砲をエンジンに喰らつたらしく、淡く煙を噴いていた。

「ルドルフ、一旦帰投するぞ！」

「つよ、了解！」

ダメージは軽度のようだが、このまま攻撃を続行することはできない。

基地で機体を替えるしかないだろう。

対空砲を喰らうのはよくあることだが、今回は私が調子に乗りすぎたことに原因がある。

自肅せねば……。

.....

どうにか基地へ着陸した後、仲間たちも弾を補給しに戻ってきた。私同様エンジンから煙を吹いている機体もあれば、穴だらけになりながら満身創痍の状態で飛んでいる者もいる。

しかし着陸すると、同僚たちは颯爽と機体から降りて、弾を装填しろ、代わりの機を用意しろと整備兵たちに指示する。これがいつもの光景だ。

「マンハイム中尉、準備完了しました！」

整備兵が私たちに告げる。

「よし、他の連中が準備できたら一緒に行く」

その時、同僚の機から怪我人が担ぎ出された。
後部機銃手で、どうやら腹部を負傷したらしい。

パイロットは全くの無表情で相方を見送ると、整備兵たちに早く弾
を装填しろと指示し始めた。

「交代の機銃手も乗せないで飛ぶつもりですかね？」

ルドルフが私に尋ねる。

「あいつは私の同期でな、気に入った奴としか組まない」

彼の名はディートリッヒ・ヴァイス。私と共にシュトゥーカ隊に入
ったベテランだ。

昔は愛想の良い気さくな奴だったが、今では全く感情を表に出すこ
とのない、氷のような男になってしまった。

そう……丁度スターリングラードの死闘から、奴は変わってしまったのだ。

以前、母親が病死したという知らせを受けた直後に、平然と出撃し
ていったことさえある。

私は、その理由を知っている。

「搭乗員、整列！」

招集がかかつた。

我々は整然と並び、再び愛機に乗り込む。

JU87Gは携行弾数が少ないため、必然的に出撃回数は多くなる。

そして400km/hも出せないこの機体で、最高速度600km/h以上の敵戦闘機をかわしつつ、対空砲火をかいくぐり敵戦車を屠るという、過酷な任務。

しかし我々に、死ぬことは許されない。

機体の補充はできても、優秀なパイロットの育成には数年かかるからだ。

例え不時着して泥まみれで逃げ出すことになろうと、我々は生き延びなければならないのである……。

.....

.....

「敵地上軍、確認！」

.....

「突入する！」

第一回の攻撃で敵は多少減ったが、T-34という戦車は次から次へと沸いてくる。

一匹見つけたら二十匹はいると思つて良い。

味方戦闘機隊の援護を受けつつ、我々は敵戦車への攻撃を開始する。

「初弾、発射！」

狙いをつけてトリガーを引き、さつと離脱。やや遠めの射撃だが、砲弾は見事にT - 34の上面装甲を貫いた。

今日はこれで四両目破壊。

「中尉、味方が不時着します！」

ルドルフが叫ぶ。

見ると被弾したJU87が、煙を吹きながら地面に滑り込んでいく。荒地ではあるが、頑丈な固定脚は折れることなく、私の眼下で前めりに「逆立ち」した状態で停止した。

だがほつとしてはいられない。

戦車部隊からは少し離れたところに降りたものの、このままでは良くても捕虜となり、強制労働所送りだ。

すると、別の一機が降下し、なんと不時着した機の近くで着陸態勢に入った。

あれは……ディートリッヒの機だ！

「ディートリッヒ！ 何をする気だ！？」

その問い合わせし、彼は無線機から一言だけ答えた。

『奴を助ける！』

「…」

…私は彼の変貌の理由を、本人から聞いていた。

母の死に涙すら浮かべなかつた彼に怒りを覚えて問い合わせたとき、

彼は「自分は泣く権利も無い人間だ」と答えた。

スターリングラードで、奴は工場への急降下爆撃を命じられ、見事にそれを達成したという。

しかしその後、破壊した工場を低空から確認したとき、彼は見てしまったのだ。

爆発で死んだ男の死体と、それに取りすがつて泣きじゃくる、小さな少女の姿を……

それ以来彼は涙を封じ、氷の仮面をつけて戦い続けてきた。

そんな彼が、仲間を助けようとしている。自分の誇りを取り戻すために……

「ハヤシマンハイム！ らよりヴァイス機を援護する！」

無線機に向かつて叫びつつ、私は機を降下させた。すでに不時着した機体にはソ連の歩兵部隊が迫り、その後方ではT-34二両がヴァイス機目がけて機銃を撃っている。ディートリッヒが着陸し、停止する前に……！

「喰らえ！」

火を噴ぐ37mm機関砲。

さきほどやつたように機体を横滑りさせ、照準で敵をなぞりながら一両目に向けて一撃目を放つ。

命中後、そのままT-34の上空を通過する。

高度が低かったため、爆発の振動が伝わってきた。

ヴァイスは着陸に成功し、不時着した搭乗員一名は彼の機体へと駆け出していた。

ソ連軍歩兵部隊が、機関銃でディートリッヒを攻撃し始めている。

私はそいつらの背後に37mm砲弾を叩き込んだ。
着弾を見て、歩兵たちは浮足立つ。

「早く離陸しろー。」

空になつていた後部座席に一人が乗り込み、ディートリッヒの機は地表を滑走し始める。

攻撃を続ける歩兵部隊に、私はもう一撃。

そしてついで、ディートリッヒは離陸に成功した。

「凄い！ やりましたよ、中尉ー。」

ルドルフが興奮する。
だが……

『ひづら、ヴァイス……帰投する……』

無線から聞こえてきたディートリッヒの声には、深い苦痛の色があつた……

……基地に着陸した後、私は先に降りたディートリッヒの機体に駆け寄った。

しかし彼は、操縦桿を握ったままこと切れていったのだ。

右胸に銃弾を受けながらも仲間を救出した彼の死に顔は安らかで、その頬には涙が伝っていた。

名誉ある死を以て、彼は氷の仮面を融かすことができただろう。

わたしは彼という最高のパイロットを、永遠に忘れない……

氷の大砲鳥 … ユンカースJU87G 戰車攻擊機（後書き）

⋮

シコトウーカの評価はルーデルの活躍によつて保たれている、という意見もあります。

まあ、機体性能は明らかに旧式化していたし、間違いではないと思ひますが（苦笑）。

しかしへドイツ軍機の中でも、この機体は特に好きです。

固定脚に逆ガル翼の武骨なデザインに、これまた武骨な37mm機関砲を積んだ姿は、まさしくドイツ人的「機能美」を表したデザインと言えるでしょう。

次は同じく「機能美」に魅かれる、FW190です。

百舌の歌声 … フォッケウルフ FW190 戦闘機

フォッケウルフ FW190

最大速度 : 690 km/h

武装 : 20 mm 機銃 × 2、 13 mm 機銃 × 2

乗員 : 1名

メッサーシュミット Bf109と双璧をなす、ドイツ空軍の主力戦闘機。

液冷エンジンが主となっていた歐州において空冷エンジンを採用したのは、Bf109へのエンジン供給を滞らせないようにするためだつたが、それにより整備性は向上した。

加えて設計者クルト・タンク博士による洗練された空力設計により、優れた速度性能と加速力を持つ傑作機となつた。

操縦性や不整地での離着陸性能も高く、総合的にBf109より優れた戦闘機と言えるだろう。

愛称はドイツ語で「百舌モズ」を意味する「ヴュルガー」。

「各機、深追いはするなよ！ 我らの任務はシユトウーカ隊の護衛だということを忘れるな！」

私はFW190の「クピットから、群を為すソ連軍機を確認した。距離はまだ遠い。

続いて、下方を飛ぶユンカースJu87Gの編隊を眺め、通信を入れる。

「攻撃隊、我らが道を開く。存分に敵戦車を狩れ」

『了解した！ 宜しく頼む！』

JU87は高度を下げていく。

我らドイツ空軍を代表する対地攻撃機だが、基本設計が古いため速度は遅く、敵戦闘機に狙われればいい的だ。故に、その護衛は大変に骨が折れる仕事だ。

「戦闘開始だ！ 散開！」

散開と言つても、四機編隊が二機ずつ分かれるだけ。

我がドイツ空軍では一機編隊を『ロッテ』と呼び最小単位とし、リーダー機は僚機の援護を受けながら戦うのが常識だ。

私は部下のヨハンと共に上昇する。

敵は戦車部隊を守ろうと、下方に気を配つてゐるだろう。

上から被さるようにして、奇襲をかけてやる。

「La - 5か……」

ソ連軍のラボチキンLa - 5は、低空でならこのFW190とも互角に戦える強敵だ。

しかし最後に物を言つのは、パイロットの腕だ。

「いつもの手でいいぞ。背中は任せる」

『了解です、デーニツ大尉!』

敵編隊の斜め上から反航して接近。

タイミングを見計らつて機体を横転降下させ、引き起こす。

私は『C』型の機動を描いて敵機の斜め後方についたが、まだ相手の機影が蟻に見える距離。

相手はまだ気づいていない。

增速しながら降下、機銃の射程内まで接近していく。

この角度では敵機に直接照準を合わせても当たらないので、敵機の未来位置を予測して撃ち込まなくてはならない。

自機と敵機、そして弾丸の速度を計算し、正確に、尚かつ素早く狙いを付ける。

……射程内に突入……捕捉!

私はトリガーを引いた。

20mm機銃が火を噴き、私は直後に離脱。

上手く命中したようで、La - 5は胴体に描かれた赤い星の辺りで真っ二つに折れ、墜ちていった。

他の敵機はようやく俺の存在に気づき、大慌てで散開した。

左右に逃げる機、横転降下する機が殆どだが、そのうち一機が私に向かつてきた。

「よし、ついてこい、ついてこい……」

私はスロットルを開き、急激に速度を上げる。

フォッケウルフ Fw190 最大の武器は、この瞬発力だ。
そして私を追つてくる La - 5 の背後に、我が僚機……ヨハン=ノイマン少尉が食らいついていた。

私が機を90度バンクさせ、垂直旋回で離脱すると、ヨハン機の撃つた 20mm 弾によつて粉々に爆散する La - 5 が見えた。

『大尉、三時方向でショトウーカが狙われています!』

自らの戦果に浮かれることなく、ヨハンが叫ぶ。

「よし、まずは私が仕掛ける。お前が撃墜しろ!」

緩やかに右旋回し、機首をそちらに向ける。

ソ連軍のヤコブレフ Yak - 3 戦闘機が、Ju87 を追つていた。
Ju87 も後部機銃手が懸命に弾をばらまき、曳光弾の帶が乱舞しているが、後部機銃というのはあくまでも牽制のための武装であり、敵機を撃墜できることは滅多にない。

だがパイロットは熟練者のように、鈍重な機体で巧みに照準をかわしている。

Yak - 3 の後ろについたが、Yak - 3 の小柄な機体に確実に命中させるにはまだ遠い。

しかし味方が狙われている以上、一刻も早く助けなくてはならない。
ならば当たりうが当たるまいが、撃つてやればよいのだ。

我らの目的はJU87の護衛。敵機も『自分が狙われている』ことを知れば、ヨハンから逃れるためにJU87の追撃を中断せざるをえない。

概ね照準を合わせ、撃つ。

私の存在に気づいたYak-3は、目論み通り左に逃れた。

「やれ、ヨハン！ 流れ弾に気をつけろ！」

『お任せを！』

ヨハンが接敵、後ろをとる。

次の瞬間、ヨハン機の機銃が火を噴き、Yak-3の左翼をもぎ取った。

錐揉み墜落していくYak-3を確認し、私はさらに周囲を見回す。

下方でJU87Gの37mm砲が吼え、土煙と爆炎を上げている。T34戦車も、あれで上面装甲を撃ち抜かれてはひとたまりもないだろう。

問題は鈍重なJU87Gで対空砲火をかわせるかだが、……こればかりは、パイロットの腕と運を信じるしかない。

我らの任務は彼らの傘となり、敵戦闘機から守ることだ。

「近い敵を片っ端から追い払うぞ！」

『了解！』

護衛任務は敵機をただ撃墜するのではなく、引っ搔き回してやるのがいい。

敵の隙を突き、連携を崩し、標的を狙うことにして集中できなくさせること。

それが、私の仕事なのだ……

……その後数回に渡つて反復攻撃を行い、この日のJu87Gの損害は被撃墜四機、小破三機。

いずれも地上砲火によるものだった。

我ら護衛機の任務は果たしたと言つて良いだろ？

基地に帰つた後、私は必ず愛機の手入れをする。

整備兵だけに任せきりでいると、不測の事態に対処できなくなるからだ。

そして何よりも、このフォッケウルフ FW190を私は愛している。Bf109も優れた戦闘機だが、私には骨太な FW190の方が合っているのだ。

例えて言つなら、Bf109は走ることのみに特化したレース用の馬。

FW190は主を乗せて猛々しく嘶き、逆境を物ともしない軍馬、といったところか。

「デーニツツ大尉、今日もお疲れ様です」

ヨハンが私に言った。

「ところで、聞きましたか？ シュトゥーカ隊の話

「ん？ いや、何のことだ？」

私が問い合わせると、ヨハンは興奮した様子で話し始める。

「JU87Gのパイロットで、被弾して不時着した味方を助けるため、自分も戦場に強行着陸した豪傑がいたんですがね……」

「ほう」

「仲間を回収して再離陸して、自分も被弾しながらなんとか基地まで戻ってきたんですけど、着陸した後パイロットは操縦桿握つたまま死んでいたと……」

何とも壮絶な死に様だ。

ヨハンが感動するのも無理はない……が。

「ヨハン、お前は私が戦場で不時着しても、助けに降りたりするなよ」

「いいえ。俺が大尉の背中を守りますので、そのような心配はいりません」

「よく言つてくれた。お前はもう一流の戦闘機乗りだ」

私の言葉に、ヨハンは首を横に振る。

「いえ、俺の目標はあくまでも大尉殿です。卓越した編隊空戦術、敵機の未来位置予測……俺は大尉には全く及びません」

「止せ、照れくさい」

どうにも私は、人に褒められるというのは慣れていない。
元が劣等生だったせいかな……。

「私だつて最初に敵と合つたときは遙か遠くから撃ちまくつたり、仲間を敵と間違えて逃げ回つたり……散々だったさ」

「大尉が初めて墜とした敵機は何ですか？」

「P - 39だ。苦労したよ」

「宜しければ、そのときの話をお聞かせください。」

再び興奮した口調で、ヨハンは言ひ。今まであまり思い出したくない記憶だったが、この辺りで誰かに話しておくるもいいかも知れない。

「……百舌ブルガ」

「は……？」

「FW190の愛称だ。百舌は小さい癖に獰猛な肉食鳥……そして獲物を木の枝に突き刺しておく『早贅』という習性を持つ。我々ドイツ人は『絞め殺す天使』と呼び、イギリス人は『屠殺人の鳥』などと呼ぶらしい」

「は、はあ……」

私の蘊蓄に、彼は意味が分からぬといった顔をする。

「私の二回目の出撃の時、イワン露助のP - 39と遭遇した」

P - 39『ニアゴグラ』はアメリカ製の機体で、ソ連へ大量に輸出

されていた。

性能は大したことないが装甲が厚く、プロペラスピナーの中央部に37mm機関砲一門が搭載されている。

「それまで戦果が無かつたため、周りの仲間に後れをとるまいと必死で追い回した。そして相手の後ろをとり、20mm弾を喰らわせた」

「墜としたのですね」

「ああ。だがその直前に、敵機のパイロットは負けを察して脱出していたのだ。……そのパイロット、どうなったと思つ？」

「えつ……」

「串刺しになつたんだよ。私の機体の……20mm機関砲の砲身にな」

ヨハンは驚愕の表情を浮かべた。
私は続ける。

「まるで舌の早贅にされた虫のよう」……。それから敵機を撃とうとする度に、そのソ連兵の目を思い出してしまつた。振りほどくのにかなりの時間がかかつたよ」

……話し終え、私はふと溜め息をついた。

「いいか、ヨハン。例え戦争でも、人を撃つ痛みを忘れるな。そぐでなくては我々は、戦闘機といつ兵器のパートになつてしまつ」

「……肝に銘じておきます」

ヨハンは敬礼をする。

我々は痛みを忘れてはならない……いつか平和な時代が来たとき、
その世界で暮らしていけるように。

『早贊』となつて果てたソ連兵の目を通して、私はそれを学んだ。

「さて……お前の機体も、しっかりと手入れをしておけよ」

「はい、デーニツツ大尉！」

ドイツ空軍エースの優れた戦果は、単純に個々の技量が優れていた
だけでなく、その卓越した集団戦法に寄るところも大きかった。
僚機が常に互いを援護する戦法あつてこそ、この優れた結果を残せ
たと言える。

しかし彼らの奮闘だけでは、東西から迫り来る敵軍を撃退する」と
はできなかつた。

田口の歌声 … フォッケウルフ FW190 戦闘機（後書き）

⋮⋮⋮

私はメッサーシュミットより、この FW190の方が好きです。
随所からクルト・タンク博士の開発者魂を感じます。
前回同様、「機能美」的なデザインにも魅かれます。

次回は、Bf110夜間戦闘機型を計画しております。
お楽しみに。

夜戦奏者（前編）…メッサーシュミットBf110夜間戦闘機（前書き）

用語解説

曳光弾……光を発しながら飛ぶ機銃弾。弾道を目視確認するために使われ、航空機の機銃は大抵は徹甲弾、炸裂弾、曳光弾の順に撃ち出される。

夜戦奏者（前編）…メッサーシュミットBf110夜間戦闘機

メッサーシュミット Bf110

最高速度：550km/h

武装：30mm機関砲×2、20mm機関砲×2、7.92mm旋

回機銃×1

乗員：2名

本来は長距離援護戦闘機として開発された双発機だが、戦闘機として活躍できたのは初期のみで、バトル・オブ・ブリテンにおいては運動能力の低さが露呈し、イギリス軍の単発戦闘機によつて多大な損害が出た。

その後は戦闘爆撃機や偵察機として活躍したが、イギリス軍が夜間爆撃を行うようになると夜間戦闘機として用いられるようになり、同様に夜戦型に改造されたJG88などと共に『ランカスター』爆撃機を迎撃つた。

日本海軍の夜間戦闘機『月光』や、陸軍の一式複座戦闘機『屠龍』も本機と似た経緯を辿っている。

戦闘機としては失敗作でも、双発故の航続距離や積載重量を活かし、様々な方面でドイツ空軍を支えた名機と言えるだろう。

⋮

夜の闇の中を、エンジン音が切り裂く。

俺は双発戦闘機 Bf 110 を駆り、英軍の爆撃機を探していた。

「どうだクルト、ヤブ蚊はいるか？」

「いや、少なくとも僕らの近くにはいない」

俺の幼馴染みにして後部座席担当の、クルト・ミッターマイラー。夜目が利く奴で、こいつのおかげで俺は敵の夜間戦闘機から逃げ延びてきたと言つていい。

照空灯の光が動き回り、地上の連中も懸命に爆撃機を探しているらしい。

操作をしている女性補助員たちも苦労しているだろう。

そのとき、光の中に機影が浮かび上がった。

「いたぞ！　『ランカスター』だ！」

俺は機体を加速させた。

アプロ『ランカスター』はイギリス空軍の四発爆撃機で、最近は毎晩のように飛来する。

奴らを迎撃するのが、俺達夜戦隊の任務だ。

「……『モスキート』も結構いるみたいだ。クルト、常に後ろに気を配つてろ」

「了解」

デ・ハビランド『モスキート』……イギリス空軍の木製双発機だ。偵察機や爆撃機など様々なバリエーションが存在するが、俺達にとって一番煩わしいのはランカスターの護衛についてくる夜間戦闘機型である。

高速性能と索敵能力が高く、次々とこちらを見つければ攻撃してくれる。

まさしくヤブ蚊のよつて厄介な奴だ。

「征くせー！」

対爆撃機の戦術には様々なものがあるが、夜戦に於いて効果的なのは相手の下に潜り込み、下から突き上げるよつて機首の機関砲を撃ち込むやり方だ。

真後ろからだと尾部銃座の銃撃を受けてしまつとの、下から攻めることにより敵機のシリエットが最大となり、弾を当てやすくなるからだ。

ただし、射撃のタイミングはシジアである。

俺は『ランカスター』より高度を下に取り、気づかれないよつて下方に潜り込む。

機首を上げ、機関砲の照準を『ランカスター』の腹に合わせ、トリガーを引く。

発射音と共に、暗闇の中を曳光弾の光が舞い、命中した炸裂弾が光を放つているのも見えた。

「墜ちろーッ！」

『ランカスター』が咄嗟に身を捻り、コーケスクリューで逃れようとする。

なんとか追従しながら機銃弾を撃ち込むと、『ランカスター』は突如オレンジ色の炎を吹きだした。

俺は慌ててに反転回避。

『ランカスター』は巨大な炎を撒き散らして爆散し、震動が俺にまで伝わってきた。

「危なつ……もづちよいで巻き込まれるところだつたよ」

クルトが言つ。

俺も背筋に冷や汗が伝つていた。

燃料タンクについた火が積んでいる爆弾に引火すれば、どんな頑丈な爆撃機でも木つ端微塵だ。

仲間達も戦闘を始め、曳光弾の光が周囲に見える。

「後方に『モスキート』！」

クルトの叫び声を聞き、咄嗟に機体を横転降下に入れる。

闇の中への急降下。体にGがかかり、俺は腹筋に力を入れた。

「……よし、大丈夫だ。間一髪だったよ」

再びクルトの声が聞こえたとき、俺の心臓は激しく脈打つていた。夜戦において一度見失った敵機を、再び補足するのは不可能に近い。故に敵機の接近に気づいたらすぐさま急降下で回避。少しでも遅れば死ぬ……。

「次の獲物をやるぞ！」

震える自分自身を勇気づけるため、俺は大声で叫んだ。

……

撃墜数四機、損害八機。

昨夜の防空戦闘の結果がこれだ。

墜とされた八機のうち、六機は敵の夜間戦闘機……あの忌々しい『モスキート』にやられたが、残りの一機の内一機は『ランカスター』を攻撃中に衝突、差し違える形となつた。

最後の一機は撃墜後、『ランカスター』が抱えていた爆弾の爆発に巻き込まれ木つ端微塵……一步間違えば、俺達もそうなつていたと思つと……。

「……リビ。ハインリビ」

俺を呼ぶ声に気づき、はっと顔を上げた。

「どうしたんだ、考え方とかい？」

「……ああ。もう少しいい戦法がないかと思つてな……」

俺の言葉に、クルトは腕を組んで唸つた。

「リスクの少ない攻撃方法か……」

「尚かつ、敵に見つかりにくければ尚いい」

昨夜俺は氣づかることなく一機を撃墜したが、その次に狙つた『ランカスター』には急激な回避運動で逃げられた。
一度逃すとなかなか捕捉できないのは、俺達も同じだ。
照空灯もそれほど当てになるわけではない。

「セウジヤイギリス軍のパイロットは、二ンジンを食つてゐから夜でも田が見えるつて話、本当か？」

「嘘だよ、そりゃ。レーダーを積んでるに決まつてる」

「そういつて、クルトはふと笑つた。

「なんだか、音楽で歎んでいたときと変わらないね」

「…………そうだな」

俺とクルトは元々、共に音楽……ジャズの道を志した身だ。
しかし中々上手くいかず、飛行機乗りへの憧れもあって軍に入った。
不思議なことにあの頃の記憶も、死と隣り合わせの世界に生きている今からすれば……楽しい思い出だつたようを感じる。

「おひと、忘れるところだった。新型機が来たらしい、見に行こう」

「新型？」

「ああ。機体はBf110だけど、新しい装備を積んであるってさ」

新しい武装……単なる大口径の機関砲などでは意味がない。

夜戦に有効な武器たらしくんだけ
上の連中にその辺の半端力が
無いからな……。

「もし、どうぞ見ておいで」

俺は腰を上げた。

「Bf110F-4型です。これなら従来の戦法よりも、効率よく爆撃機を墜とせるはずです」

整備員が解説する。

その機体は確かに今までのBf110と変わらなかつたが、一つだけ異なる点があつた。

背部から上向きに機銃が突き出ているのだ。

「機銃が斜めについてるな」

「はい。『ランカスター』の腹下に潜り込み、こいつで攻撃するわ

け
で
す

「当たるのか？」

「試験も行われて、最適の角度で搭載されています。そもそも先の大戦のときから、『』の発想はありましたからね」

「……単純なことだが、考えてみれば理に適つている。
これなら敵機に突っ込むことなく、一番防御の薄い機体下面を狙い
撃つことが出来る。」

「照準は？」

「風防の上面についてます。」

「頭越しに狙いをつけるわけか。『』の武装の名は？」

「“シユレーゲムジーク”です」

シユレーゲムジーク……『斜めの音楽』、即ちジャズ。
軍に入ると同時に捨てた夢なのに、どういう巡り合わせか……。

「試してみようよ、ハインリヒ」

「……ああ」

自然と、俺の顔に笑みが溢れた。

……その夜。

今日もまた、『ランカスター』の編隊が接近している。照空灯や地上からの誘導を頼りに、迎撃に向かう。

「視認した！ 攻撃を開始する！」

見つからないようにエンジンの排気炎を抑え、低空から忍び寄る。そしてシュレーゲムジークを使い、『ランカスター』を追いながら撃つのだ。

これなら見つかりにくい上に、敵の弱点である爆弾倉へ正確に撃ち込めるだろう。

「『モスキート』はまだ、こいつを捕捉していないみたいだよ」

「俺達が今までと違う『コースを飛んでるからな

十分な距離まで接近、上手く腹下に潜り込んだ。

上を見上げ、風防に刻まれた照準を『ランカスター』の爆弾倉に合わせる。

「ジャズを一曲、くれてやるー。」

トリガーを引くと、シュレーゲムジークの発射音が鳴り響いた。

隠密性を高めるため、光量を抑えた曳光弾を使用している。

爆弾倉を狙つて数秒間撃ち込むと、『ランカスター』はパッと炎を吹きだした。

「退避！」

俺は機体を左旋回させる。

『ランカスター』は真つ一つに折れ、闇の中に墜ちていく。

「やった！ 墜ちたよー。」

「当たるもんだな。」こつは使えるぜ」

敵と距離を保つたまま、弱点を狙えるといつのは大きな利点だ。ただ墜落後すぐに回避しないと、敵機の残骸が頭上に降つてくるが。

「『モスキート』は？」

「まだ気づいていないらしい。もう少しはいけそうだよ」

「よしー。」

次の『ランカスター』に機首を向け、忍び寄る。俺はふと、思つたことを口にした。

「なあクルト。戦争が終わつたら、もつ一回ジャズをやってみないか？」

「……奇遇だね。僕も同じ事を考えてたよ」

「……………なら、生き残らないとなー。」

やがてBf110はレーダーを搭載し、連合軍の爆撃機迎撃に奮闘した。

レーダー先進国であつたイギリスは欺瞞紙によるレーダー対策を行つたが、シユレーゲムジークに対しては有効な対策を立てられず、多くの損害を出すこととなる。

奇しくも同年同月、日本海軍でも同じ原理の武装・斜銃が発明され、それまで用済み扱いされていた十三試双発陸上戦闘機が夜間戦闘機『月光』として生まれ変わった。

⋮

ドイツ版『月光』とも言える機体・Bf110でした。

双発長距離戦闘機として開発された機体は結構ありますか、ちゃんと「昼間戦闘機」として活躍できたのは米軍のP-38「ルーラー」でしょう。

しかしそれ以外の用途に活路を見出し活躍したのですから、やはり名機と呼んで差し支えないでしょう。

史上最強の夜戦パイロット・ハインツ＝ヴォルフガング・シュナウファー（撃墜数121機。全て夜戦での記録）も、大戦中この機体のみを使っています。

今回の話だけではなんか中途半端だったので、次回のHe219と前後編にしました。

夜戦奏者（後編）：ハインケルHe219夜間戦闘機（前書き）

前回の後編なので、主人公は同じです。

今までと比べると長いので、その辺りご注意を（汗）

用語解説

ハ木・宇田アンテナ……日本のハ木秀次と宇田新太郎が開発したアンテナで、通信やレーダーなどに使用された。画期的な発明だったが日本では理解されず、欧米諸国（後に敵国となるアメリカ・イギリスを含む）の方が先にこの技術の有用性に気づき、あらゆる用途に使用していく。レーダーや通信機器などを軽視した日本軍の攻撃偏重主義の結果は、敗戦という事実に集約される。

夜戦奏者（後編）：ハインケルHe219夜間戦闘機

ハインケル He219夜間戦闘機

最高速度：616km/h

武装：20mm機関砲×6（腹部に4、主翼に2）、30mm機関砲×2

乗員：2名

ハインケル社が開発した本格的夜間戦闘機。

夜間戦闘機としてはかなりの高速であると同時に重武装を誇り、初陣で『ランカスター』爆撃機を5機撃墜する鮮烈なデビューを飾つた。

「この機を2000機用意しなければ、英軍の爆撃を阻止できない」と言わされたほどだったが、搭載するエンジンの供給や、設計者であるハインケル博士のナチス嫌いなどが原因で生産中止が命令されてしまう。

しかし現場での需要から、その後もハインケル社は空軍省に隠れて細々と生産を行い、僅かながら部隊に引き渡していた。

そのため、バリエーションなどは詳しく分かっていない部分もある。愛称はドイツ語で「ワシミミズク」を意味する『ウーフー』。

：

1944年

第三帝国の敗色は濃くなつてきたが、上の連中が降伏せず、敵の夜間爆撃が止まない以上、俺達に休みは無い。

俺とクルトはシュレーゲムジークを使って今も戦果を挙げているが、連合軍の手札はまるで底なしだ。

正直言つて、俺達は相当苦しい戦いを強いられている。

「ハインリヒ、良い知らせだよ」

部屋に入ってきたクルトが、俺にそう言つた。

「アイゼンハワーでもおつ死んだか?」

「残念ながら違う」

クルトはにやりと笑つ。

「『ウーフー』が来たんだ」

「何！？」

俺は即座に立ち上がり、飛行場へ駆けだした。クルトが慌てて後からついてくる。

「何機来たんだ！？」

「一機だけ！ ハインケルから非公式ルートで納入された！ 僕らが乗ることになつてゐるらしい！」

「よし！」

飛行場に出ると、空輸されたばかりの大型戦闘機が停めてあつた。機首には『鹿の角』などと呼ばれるハムアンテナが張り出し、全体的に厳つい風貌だ。

これこそ俺が待ち望んでいた、本格的夜間戦闘機ハインケルHe 219……通称『ウーフー』。

夜のハンター・ワシミニスク……夜戦に相応しい渾名だ。導入されたのは一年前だが、上の連中の無理解のせいでの生産が中止されてしまい、今まで配備されなかつた。

それでも極秘に生産を続けたハインケル社に感謝したい。今となつては全てが遅すぎるが、この機体があれば俺達は戦争に負ける前に一花咲かせられる。

無差別爆撃で犠牲になる一般市民を、少しでも守れるはずだ。

「はは、早速駆けつけて来おつたか」

聞き覚えのある声に振り向くと、基地司令が近くに来ていた。

咄嗟に敬礼をする。

「この機体はお前達に托す。一機でも多くの敵機を墜とすこと、そして必ず生還することを期待する」

「はっ！ 必ず！」

……その後俺達は『ウーフー』の慣らし飛行などを行った後、爆撃に備えた。

クルトも新しいレーダーの操作を練習し、万全の態勢を整える。

そして夜。

迫り来る爆撃機編隊を基地のレーダーが察知し、出撃命令が下る。

「行くぜ、クルト！」

「ああ！」

機体を滑走路へタキシングさせ、スロットルを開く。

重い機体がゆっくりと加速し始め、やがてふわりと宙に浮き上がる。ある程度上がつたら素早く車輪を引き込み、速力を上げて敵編隊へと向かった。

離陸時に特に感じことだが、機体の重さの割にエンジンが出力不足ではある。

しかし飛び立つた後なら、最高速度600km/h以上の高速性を発揮する。

『防空に上がった各機へ。しかしのレーダーでは、十時の方向に敵編隊を捉えている』

地上からの無線が入った。

「クルト、どうだ？」

「うーん、レンジが狭いのは変わらないね」

俺と背中合わせに座っているクルトは、レーダーを覗き込んで唸つた。

「レーダーアンテナを、ちょい左に向けてくれ

「いいか？」

エルロンとラダーを利かせ、アンテナの張り出した機首を左に向ける。

「おっ、反応有り！ 方位は……」

クルトの指示する方向へ進路を取り、目を見張る。
排気炎の光が点々と見えた。

「各機、いつも通り後下方から攻撃せよ！ レーダー手は『モスキート』に注意！」

敵の夜間戦闘機は今でも脅威だが、後方警戒レーダーや敵のレーダー照射を察知する装置のおかげで、いくらか避けやすくなつた。

とはいえ、やはり一瞬の判断の遅れが死を招く。

接近した後息を潜めて、『ランカスター』の腹下に潜り込む。試乗したときに分かつたことだが、この『ウーフー』は重く翼がかいため、あまり小回りが利かない。

シユレーゲムジークを喰らわせた後の退避を、今までより素早く行う必要がある。

場合によつては前方の機関砲で攻撃した方がいいかもしない。

「照準良し！」

頭上の照準を『ランカスター』の腹に合わせ、トリガーを引く！シユレーゲムジークから30mm弾が放たれ、爆弾倉の辺りに破裂。俺が素早く機体を捻つて離脱すると、『ランカスター』は火を噴き、やがて木つ端微塵に吹き飛んだ。
さすがはラインメタル・ボルジッヒ社製MK108機関砲……『ランカスター』やB-17も四、五発当てれば事足りる。

「よし、次だ！」

「機首を三十度くらい右へ振ってくれ。その辺りに敵機の影らしい物が見える」

レーダー手になつてからも、相変わらず夜目の利く奴だ。
誘導に従い、機首を振る。

「反応あり。……『ランカスター』だ」

「了解。後方警戒レーダーに注意してくれ」

この機体なら、『モスキート』でもなんとか振り切れる。
これで『ランカスター』を片つぱしから……

『いやあクロイツェル！ 今敵の夜間戦闘機に攻撃を受けました！』

突如、部下から通信が入った。

先日入隊してきた新入りだ。

「状況は！？」

『回避しました！ それよりも、敵は……ウワアアアアア！』

叫び声と共に、通信機に雑音が混じった。

「クロイツェル！ ビーヴした！？ 応答しろー！」

……やがて無線からは雑音のみが聞こえてくる。

その時、闇の中で一機の飛行機が爆散する姿が見えた。

爆光の中微かに見えた機首のシルエットは……間違いなく、味方の
Bf110Gだった。

「くそつ！ ジョンブル共め……！」

「ハインリヒ、今は爆撃機の迎撃に集中するんだ！」

「分かつてん！ 派手に暴れてやるぜー！」

……結局、俺は単独で四機の『ランカスター』を撃墜する戦果を上げたが、味方は三機墜とされた。

最初にやられたクロイツェルはレーダー手共々脱出できたが、重傷を負っている。

『ウーフー』の力は確認できたが、こいつ一機だけでは俺達の敵しい状況は変わらない……。

「ハインリヒ、ちょっと検証してみたんだけど……」

クルトは手書きの図を俺の前に広げた。

「クロイツェルから話を聞いたところ、初撃を回避した後敵機は自分たちの横に出たらしい。そのとき、銃撃を喰らって墜とされた」

図に書いたラインを指でなぞりながら、クルトは解説する。

「同航で真横に撃つた……ってことは、相手は銃座付きか?」

「ああ、それは間違いない。どうもこの時の時間帯などから考えると、丁度クロイツェル機が月光に照らされて、シルエットが見える位置だつたんだよ」

月光……夜戦において、敵にも味方にもなる要素だ。

クロイツェルは敵の攻撃を咄嗟に回避できても、月の位置まで考えている暇は無かつたのだろう。

「それにしても、敵は本当に戦闘機なのか?」この図を見る限り、真横に銃座を向けて撃つてゐたいだが」

爆撃機なら、そこまで射角の広い銃座がついている場合もある。

しかし戦闘機となると、例え付いていたとしても後方への牽制に使う程度だ。

「ああ。それにクロイツェルは撃墜される直前、銃撃の発射炎もあって敵機のシルエットが見えたらしいんだけど……P - 38に似ていたとのことだ」

「P - 38だあ？」

アメリカ製の双発戦闘機 P - 38。

胴体が一つあるという妙なフォルムは、似ている機体など滅多ない。

「そこから察するに、敵はP - 61『ブラックワイドウ』。アメリカ軍の新型夜間戦闘機で、P - 38と同じ双発・双胴型だ。背部にリモコン式旋回機銃がついてる」

「ついにアメリカ軍機が出てきたか」

『モスキート』だけでも厄介だといつのに、この上新型……連合軍の持ち札は底無しか。

「それにも『ブラックワイドウ』……『黒衣の未亡人』とはまた不吉な名前だな」

「転じて、どこだかの島に住む毒蜘蛛の名前らしいよ」

「ちつ、モスキート、モスキートの次は毒蜘蛛かよ」

連合軍の夜戦乗りは虫が好きなのか？

「クルト、司令に直談判して、その蜘蛛野郎を叩き落とせ！」。そうすりやみんなのテンションが上がる

「それはいいけど、作戦は？」

「まず、『ウーフー』と性能を比べてみよ！」

「えーと、P-61はちょっとした爆撃機並の横幅があるし重武装だから、機動性は『ウーフー』とそれほど差はないかもね。レーダーの性能は当然向こうが上。でも『モスキート』みたいに木製じゃないから、レーダーにはしっかり映るはずだ」

クルトは冷静に分析していく。

「結局、戦法が物を言つんじゃないかな？」

「戦術……ねえ」

やはり、最後は戦闘機乗りの腕と知恵が勝負を決める。俺が頭を捻ったとき、ふと一つの考えが浮かんだ。

「なあ、疑似餌って知ってるか？」

「小魚の模型とかを餌の代わりにして釣りをするやつ？」

「そりゃ……それを空戦でやるんだ」

.....

翌日の夜、俺達は迎撃に上がった。

と言つても、俺のターゲットは『ランカスター』ではなく、P - 6
1『ブラックウイドウ』。

ワシミミズクの力で毒蜘蛛を狩つてやる。

「晴れて良かつたね。丁度良く月が出ている」

「月が出てないことは、上手くいかないからな」

俺は通信機のスイッチを入れた。

「一番機、聞こえるか？ 賴むぞ」

『お任せ下さい!』

この作戦は僚機のBf110との連携によつて行つ。
地上レーダーから送られてくる情報に耳を傾けながら、ターゲット
を探す。

俺達以外は、『ランカスター』に向かつている。

「……いた！ 一次方向、『ランカスター』編隊の上だ！ こっち
に来る！」

「よし、仕掛けるぞ！ 一番機、しつかり合わせろー。」

『はい！』

俺は高度と月の位置を考慮しながら飛ぶ。

疑似餌を仕掛けるのだ。

「今だ、投下！」

レバーを引き、翼の下に取り付けた秘密兵器を投下する。レーダーを攪乱するアルミニウム……チャフといつ奴だ。広域にばらまけば敵のレーダーを乱反射させ、自分の位置を分からなくすることができるが、今回は塊状に撒いた。

こうすれば敵のレーダーには、それが戦闘機と映るだろ？。投下後、俺は速やかに離脱する。

「どうだ、クルト？」

「釣れたよ！ 排気炎が近づいてくる！」

俺も後ろを向いて確認すると、廢棄炎が俺の目に見えた。先ほど投下したチャフを追っている。

『捕捉しました！ 攻撃します！』

待機していた二番機からの連絡。

直後、微かに見えた曳光弾に続いて、暗闇の中から炎が噴きだす。次に見えたのは、爆炎に照らされながら吹き飛ぶP-61の破片だった。

「墜ちた！」

『撃墜確認！ やりましたよ！』

……チャフを撒いた地点は、二番機から見て丁度月に照らされる地

点。

俺たちが仕掛けた疑似餌に釣られた敵を、一一番機が撃ち落とす……上手くいったようだ。

「この戦術は使えるね

「ああ！　俺の頭も捨てたもんじゃないな！」

これで仲間の士気も上がる……そう思ったときだった。

「！　後方警戒レーダー作動！」

クルトが叫んだ直後、俺は咄嗟に機を横転降下させてスロットルを開いた。

曳光弾の光が頭上を通り過ぎる。

「食いついてくるよ！」

「ちつ、目のいい奴だ！」

こっちの排氣炎を追っているのか。

『ウーフー』の加速力なら振り切れるかも知れない。

しかし敵の機銃は発射速度に優れる……振り切る前に弾を喰らう可能性も……！

「しつかり掴まつてろー！」

俺は機体をバレルロールに入れた。

計算などせず、ただ戦闘機乗りの本能にのみ従つ。機が背面になつたとき、敵は俺の下をぐぐつた。

「ウオオアアア！」

ショレーゲムジークのトリガーを引く。放たれた30mm弾が、背中あわせ状態の敵機に叩きつけられ……視界が炎で覆われた。

「……やつた、か？」

炎が遠ざかっていく。

それは炎上しながら墜ちていく、P-61の姿だった。

「な……なんて無茶するんだよ、ハインリヒ」

クルトが言つ。

「……形に囚われないのが、ジャズつてもんだる。……敵夜間戦闘機を撃墜、これより爆撃機の迎撃に向かう！」

……俺たち夜戦隊の戦いが歴史に語られることは、そう多くないだろ。う。

だが俺たちは、この暗闇の中に自分の誇りと光を見出して、戦つた

……

夜戦奏者（後編）　：　ハインケルHe219夜間戦闘機（後書き）

……

お読みいただきありがとうございます。

本格的夜間戦闘機・He219ですが、様々な事情から236機という少數しか生産されませんでした。

悲運の名機、と言つたところでしょうか。

ドイツ空軍はレーダー技術が進歩していたので（それでも連合国には及びませんでしたが）、日本軍よりも夜間戦闘機が活躍できました。

まあB-29が歐州戦線にも使われていたら、話は違つていたと思いますが。

ハ木・宇田アンテナの発明者を出しながらレーダーのような防御的兵器を軽視した日本軍……。いつ見ると、物量に圧倒されたとか言う以前に「負けて当然」という要素が多数あつたんだなあ。

さて、次回は有名機メッサー・シュルツトBf109です。
お楽しみに。

復讐の果て…メッサーシュミットBf109戦闘機

メッサーシュミット Bf109G

最高速度：621km/h

武装：13mm機銃×2、20mm機関砲×2、30mmモーター

カノン × 1

乗員：1名

ドイツ空軍の主力戦闘機。

第一次大戦開戦前から第三帝国崩壊のその日まで、改良に改良を重ねて主力機の座を保ち続けた。

西部戦線ではイギリス軍の『スピットファイア』、東部戦線ではソ連軍のYak戦闘機などのライバル相手に奮闘し、352機撃墜のエーリヒ・ハルトマンを筆頭に多くのエースパイロットを生んでいる。

航続距離が短いためイギリスへの遠征では苦戦を強いられたが、それは運用上のミスであり、戦闘機としての性能は非常に優れていた。弱点として、主脚構造が脆弱で離着陸時の事故が多発したことが挙げられる。

このG型は後期の主力であり、多数のバリエーションが存在した。

.....

⋮
⋮

私はドイツ空軍少佐・ハインツ・マインホフ。

バトル・オブ・ブリテンの時から、私は自機の機首に鷲の爪を模したエンブレムを描いていた。

働きが目立つようになると、思つてのことだ。

私の撃墜数は96機……東部戦線の連中には100機や200機墜としている奴らもいるが、イギリスの『スピットファイア』やアメリカのP-51を相手にする西部戦線では、これは優れたスコアなのだ。

私は軍人としては、騎士道に忠実だったと思つ。ついこの間までの話だが……

1945年 2月

「馬鹿な……ドレスデンが……」

目の前に広がるのは、瓦礫と化した我が故郷。
そして、黒焦げになつた私の恋人の体。

「何故だ……この街に軍事施設など……」

文化遺産が誇らしげに立ち並び、エルベ河畔のフィレンツェと呼ば
れた古都・ドレスデン……
ドイツ第三帝国の敗北がほぼ確定した今になつて、連合軍はこの街
に無差別爆撃をかけた。

軍事的な目標など、何も無いといふの……

「ハンナ、……嘘だと言つてくれ……何故お前まで……」

……私はひたすら啜り泣いた。

涙はやがて枯れ……憎悪へと変化した。

そして今。

私はBf109G-6を駆り、米軍爆撃機B-17の大編隊を追っている。

我々の任務は護衛機のP-51を撃墜し、爆撃機へ挑むFW190の道を開くことだ。

僚機のフリツツと^{ロッテ}編隊を組み、スロットルを開く。

「フリツツ、しつかりついてこい！」

『了解！』

Bf109は航続距離が短いため、イギリスへの侵攻作戦時は苦戦を強いられた。

しかし迎撃戦なら、大量の燃料を積んだ敵の護衛機よりはむしろバランスがとれている。

加えてパイロットの体力的な余裕もある。

機を加速させ、P-51に下方から食らいつく。

最も見つかりにくい位置からの奇襲だ。

戦闘が始まったのに直進飛行を続けていることから、敵のパイロッ

トは大した奴じゃないことが分かる。
勝ち戦に驕つて新米を出してきたか。

「恐怖を教えてやる！」

丁度コクピットの位置に当たるよう、機銃を撃つ。
徹甲弾が装甲を貫通し、パイロットをやられたP-51は錐揉みしながら墜ちていった。

他のP-51は慌てて散開、こちらの背後を取つとする。
だが今更遅い。

適当に蹴散らしてやれば、FW190隊の道は開ける。

「ふん！」

次のP-51に食らいついて、撃つ。

今度はかわされたが、カバーに入つたフリツツが攻撃をかけた。
フリツツの機銃弾が命中し、P-51はエンジンから火を噴く。

「フリツツ、まだ飛んでいるぞ！ とどめを刺せ！」

『奴はもう戦えません！ 放つておけば墜ちます！』

「馬鹿者！ パイロットが生きている限り、勝ちにはならん！」

フリツツは優秀だが、まだ甘さがあった。

バトル・オブ・ブリテンの頃の自分を見ているようで、苛立ちを覚える。

私はようようと飛んでいるP-51にとどめの一撃を食らわせた。
燃料に引火して爆散するP-51……脱出は無い。

『少佐……』

「これが戦争だ、フリツツ！」

……それからしばらくして、基地から帰投命令が出た。

F W 1 9 0 部隊は、20機近くのB - 1 7 を撃墜した。たが、まだ数十機が爆弾を抱えて飛んでいる。

「くわー！」

意地でも叩き落としてやりたいが、燃料も弾ももう僅かだ。
ならば、『別の物』を狙うしかない。

「……見つけた」

撃墜されたB - 1 7 の搭乗員たちが、パラシユートで脱出し空中に浮かんでいた。

奴らを生かして帰せば、また爆撃機に乗りやつてくる。

私はパラシユートに接近し、照準を合わせ……引き金を引く。

軽快な発射音の後、パラシユートは20 m弾に引き裂かれ、のろしのような帶状の形になった。

速度制御の機能を失い、ぶら下がっている兵士と共に地上へと墜ちていいく。

『少佐ー、お止めください……』

「やかましいー！」

私は通信を切ると、次のパラシユートに照準を合わせて、撃つ。

厚い装甲と大量の銃座に守られた爆撃機に乗っているならまだしも、パラシユートで降下中では恐怖を感じることしかできません。地面に叩きつけられて、汚らしい肉片となるがいい。

「貴様等の爆撃で死んだ民間人の気持ちを、少しあは味わえ！」

……バトル・オブ・ブリテンの頃、ドイツ空軍のパイロットは誰もが騎士道を胸に戦っていた。

戦闘機乗りは傷ついた敵機を撃墜して手柄を立てるのを恥とし、急降下爆撃隊も爆撃目標を見失った際には民間人に被害が出るのを防ぐため、爆弾を無責任に投棄することはなかつた。

私もそうだ。

ドーバー海峡で、被弾して辛うじて飛んでいる英軍機と遭遇したとき、わざわざ敬礼までして見逃した。

後1機墜とせば撃墜数10というところだったが、手負いの敵機を墜として手柄を立てるなどを、私のプライドが許さなかつた。

しかし、我が軍の爆撃隊がロンドン市街を誤爆したことにより、戦争は変わつた。

連合軍が報復としてベルリン夜間爆撃を実行し、民間人の犠牲も厭わぬ無差別爆撃の時代が始まつたのだ。

戦争には善悪も、人道も無い……しかし連合軍は何の軍事目標も無いドレスデンを爆撃し、生きている一般市民には片端から機銃掃射をかけた。

神が彼らを裁かぬと言つのなら、私はむしろ悪魔に魂を売つ。

否……戦乱の世で神の存在を求めることが間違いなのだ。

「一度とドイツの空を飛ぶな！」

3つ目のパラシュートを撃つた。
機を横滑りさせて、4つ目を狙つ……が。

突如フリッツの機が、立ちふさがるように私の機の前へ出た。

「フリッツ！ 邪魔をするな！」

通信機を入れ、怒鳴る。

『お止めください、マインホフ少佐！ 我らルフトバッフェの誇り
は何処へ行つたのですか！？』

「誇りだと！？ そんな物で国が守れるか！ 敵兵を一人見逃せば、
その分だけ罪もない民間人が死ぬ！ それが今の戦争だ！」

『そんな時代だからこそ、我々だけは誇りを守るべきです！』

「ぐじー！ そこをどけ！ まとめて撃ち落とすぞ！」

だがその時、別方向から曳光弾の光が飛来した。
私は咄嗟に機を反転させる。

「新手か！」

後方から飛来する四機の戦闘機……イギリス空軍の『スピットファイア』だ。

フリツツ機が攻撃を受け、煙を噴く。

「フリツツー！」

『少佐……どうか……！　誇りを……我らの誇りを……！』

その言葉を最後に、通信は途絶えた。

フリツツの安否を確かめている暇はない。

今この攻撃は未来位置を見越しての、正確な射撃……手練れだ。

「くつー！」

機体を垂直にし、急旋回する。

敵の隊長機は私を追い越さないよう、速度を落として半径の大きい旋回で食らいってきた。

燃料が心配だ、上手く振り切ることを考えなくては。

だがパラシユートを追つて降下してきたため、この低高度で急降下はできない。

他の仲間はすでに飛び去ってしまったようだから、援護も頼めない。私は緊急用のメタノールブースターのスイッチを入れ、機首を上げた。

エンジンの出力が上がり、機体は上昇する。

……しかし。

鈍い音の直後、エンジンが黒煙を噴いた。

「な……っ！」

見越し射撃を喰らつたのか。

急上昇する私の機の未来位置を予測し、更に地球の重力による弾道変化まで計算に入れての攻撃。

こんな芸当のできるパイロットが、連合軍側にもいたとは……。

「……これまでか」

エンジンの出力が落ち、私は辛うじて機体の姿勢を保つていたが、もう逃げられない。

かといってパラシュートで脱出するほど、私は虫の良い人間ではない。

憎しみに駆られて冷静さを失い、部下さえも巻き込んでしまった。

死の間際にあって、私は不思議と冷静だった。

考えてみれば私も、長く飛びすぎたかもしれない。

いい加減に疲れた。

これだけの強敵に墜とされるなら、文句はない。

これで、私も……。

「……？」

『スピットファイア』は、なかなか私にとどめを刺さない。機銃が故障したのだろうか。

突然、隊長機と思われる『スピットファイア』が、私の真横に並んだ。

パイロットは風防を開け、私の方を見た。

「一。」

その男は、以前私がドーバー海峡で見逃したパイロットだった。

私の機体のエンブレムを覚えていたのか。彼は私に敬礼をすると、機を反転させた。他の『スピットファイア』もそれに続いて、飛び去っていく。

……あの頃の私への、返礼といふことか。

私は死に損なつた。

神とやらの悪戯か、それとも悪魔からも見放されたのか。

私にこれ以上、何処へ飛べと言つのだ……？

復讐の果て … メッサーシュミットBf109戦闘機（後書き）

さて、フォッケウルフ Fw190と双璧を成すドイツ空軍主力戦闘機・Bf109です。

問題を抱えながらも改良を重ね、最期までドイツを支え続けた名機です。

作中に書いたように、どちらかと云ふと迎撃戦闘機に向いていたようです。

バトル・オブ・ブリテンでは航続距離の短い機体に無理矢理爆撃機に随伴させようとしたのですから、これは傭兵側のミスでしょう。連合軍のドレステン爆撃は本当に悲惨なものでした。

軍事施設などなく、様々な芸術品が保管されている古都に対し、しかも戦争の趨勢がすでに決まっていた時期に行われたこの爆撃は、ナチスを憎んでいたイギリス国民からも非難されました。

血で血を洗う、戦略爆撃の応酬……結局のところ、戦争に正義など無いのでしょうか。

春秋に義戦無し、という中国の故事もあります。
しかしそんな世界だからこそ、兵士達は誇りを求めるのかも知れません。

さて、次回は究極の短距離離着陸機・フィーゼラー Fw156『シコトルヒ』を、と思っております。

なにせ観測・連絡機ですので、メッサーシュミットなどに比べればかなりマイナーですが、私としてはかなり好きな機体です。では、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7737i/>

名機たちへの追憶 ドイツ空軍編

2010年10月9日00時57分発行